

Point

当社では2017年よりチゴモズの研究を開始し、国内の分布域や総個体数、生息環境条件等を明らかにしてきました。一部の生息地の消失が確認されており、このままではチゴモズの生息地が人知れず失われてしまうことが危惧されます。これまでの研究結果と現地の状況をもとにチゴモズの生息地の保全対策について提案します。

絶滅危惧種チゴモズの生息地保全の提案

国土環境研究所 自然環境保全部 谷口 裕紀、田悟 和巳、柏原 聡、生物多様性研究センター 樋口 広芳、神田 修二

はじめに

チゴモズ(写真1)は、全長約17.5cm、頭部は灰色で、顔には目を通る黒い帯があり、背中と翼は赤褐色、胸と腹側が真っ白な小型の鳥です。「ギチ、ギチ、ギチ、ギチ」とよく響く声で鳴きます。昆虫類を主食にしています。標高800m以下の低地から低山の明るい広葉樹林、針広混交林、開けた雑木林、林縁、農耕地等、ごく普通のありふれた環境に生息していますが、日本での分布は局所的です。春から夏に日本に来て繁殖し、繁殖後は越冬のため南方に渡る夏鳥です。



写真1 チゴモズ

世界的に最も情報が少ないモズの仲間の1種で、環境省レッドリストでは絶滅危惧種 I A類に選定されています。

生息数については不明な点が多いですが、環境省による全国鳥類繁殖分布調査によれば、1980年代から1990年代に激減と報告¹⁾され、保全の必要性が極めて高い種の一つです。

チゴモズの生息環境の解析

当社では、秋田県から新潟県までの沿岸部におけるチゴモズの分布調査を実施した結果をもとに、Maxentモデル^{*}を使い、秋田県から新潟県の日本海側平野部全体の分布域の推定を行いました(図1)。

解析の結果、この範囲内でのつがい数は160つがいであることがわかりました。本地域は本種にとっての最後のまとまった繁殖地であることから、この数が国内のほぼすべ

^{*} Maxentモデル: 対象種が確認された場所の植生などの環境情報と、ランダムに抽出された場所の環境情報を比較することで、対象種が確認された場所の特徴を解析し、対象種の分布域を推定する方法

でのチゴモズのつがい数と考えられます。繁殖環境の特徴は、「クロマツ林およびその周辺の畑地が組み合わさった環境」もしくは「草地環境等のギャップがあるクロマツ林」でした²⁾。



図1 推定されたチゴモズの分布²⁾
(灰色は解析範囲。赤い部分はMaxentモデルで推定されたチゴモズの生息域)

チゴモズの生息数減少の要因

生息数減少の主な要因として、繁殖地の生息環境の消失、すなわち、開発等による「人為的改変」、畑地の放棄等の「耕作地の減少」、クロマツ防風林の松枯れ対策である防虫剤散布による「チゴモズ食物資源(昆虫類)の減少」等があげられます。

このほか、国内の繁殖地の問題だけでなく、中国や東南アジア等の渡り中継地やボルネオ島等の越冬地³⁾の生息地の改変、森林伐採、捕獲・狩猟の問題も考えられます。

生息地の消失の事例

2017年にチゴモズ9つがいが生息していた畑地に、2023年7月に再び訪れてみると、農業の後継者不足で放棄された畑地が行政により買い取られ、開発事業により造成地に変貌していました。チゴモズの生息地が消失し、少なくとも3つがい消失⁴⁾していました。

チゴモズの生息環境は、ごく普通にありふれた環境だからこそ人の距離も近く、開発により消失しやすい状況にあります。

開発の背景には、近年の農業従事者の減少による畑地の減少があり、畑地の減少は生息地の消失につながると想定されます。

保全対策の提案

(1)生息地情報を公的機関等に共有・周知

今回の事例は、畑地を買い取った行政が、チゴモズの生息地とは知らずに開発したことよるとわかりました。そこで、「チゴモズの生息地情報を公的機関等に共有・周知する」ことが必要と考えられます。

具体的には、文献や当社で実施した調査結果等から、チゴモズの生息地の位置情報等をGISデータで一括管理し、漏洩に留意しつつ、生息地の県、市町村等の公的機関と情報を共有することです。

公的機関は、各種の開発計画の段階で、生息地情報と照らし合わせることで、生息地に配慮した工事計画、住宅地開発等を行うことが可能となります。

(2)エシカル消費の推進による畑地の維持

現在の生息環境の維持、例えば、生息地の畑地をどのように維持していくかも大きな課題です。

「エシカル消費」とは、「地域の活性化や雇用等を含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動」のことです。SDGsの12番目「つくる責任、つかう責任」にも通じる考え方です。

絶滅危惧種チゴモズの生息地である畑地の農産物を購入することが生態系、特にチゴモズの保全につながることを意識づけることにより、野菜・果物、鑑賞用植物等の商品が付加価値化され、売り上げが向上すれば、畑地が維持されてチゴモズ生息地の保全にもなり、Win-Winの関係が構築されます。

ただし、農業の継続はあくまで地域の問題でもあり、まだまだ課題は山積みです。

(3)生息環境の創出

新たに「生息環境を創出」することも重要です。現地調

査の結果、クロマツ林が密で林内が暗く、草草が少ない環境にはチゴモズが生息していなかったことから、生息環境創出方法として、枝打ちや密度管理でクロマツ林の林内空間を広くすること、林縁部に草地環境を創出することが考えられます(写真2)。また、周辺に樹林環境がない畑地は、畑地の周囲にクロマツ等を植林する方法も考えられます。



写真2 生息環境創出のイメージ
(草草が少ない樹林の林縁部に部分的に伐採し、草地環境を創出する案)

おわりに

保全対策を進めるにあたっては、地域住民、土地所有者、行政等関係するさまざまな方々と協議し、合意形成することが必要不可欠です。

「絶滅危惧種チゴモズの保全と地域活性化の融合」を目的として、チゴモズの生息適地の創出(樹林に囲まれた畑地の環境)をまちづくりに取り込むなど地域一体となって、地域の将来像に適した保全対策の構築を行っていきたいと考えています。

〔引用文献〕

- 1) 鳥類繁殖分布調査会(2021),自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年
- 2) 田悟 和巳, 横山 陽子, 谷口 裕紀, 柏原 聡, 樋口 広芳(2023), 日本海沿岸部におけるチゴモズ *Lanius tigrinus* の分布と個体数, 日本鳥学会誌72(1):67-76
- 3) 谷口 裕紀, 原田 俊司, 柏原 聡, 横山 陽子, 大坪 二郎, 田悟 和巳, 樋口 広芳(2020), ジオロケーターによる絶滅危惧種チゴモズの渡りルートの推定, 技術広報誌i-net Vol.56:2-3
- 4) 谷口 裕紀, 田悟 和巳, 神田 修二, 樋口 広芳(2023), 日本鳥学会 2023年度大会 講演要旨集, 口頭発表要旨:59